

## 学 位 論 文 題 名

## 明代後期内閣政治史研究

－十六世紀後半の「北虜」問題をめぐる政治過程分析を中心として－

## 学位論文内容の要旨

本論文は、16 世紀後半における中国明王朝の政治史を、「北虜」問題といわれる対モンゴル政策の展開を題材として、中央における政治過程の分析を中心に考察したものである。主題として取り上げられるのは、本来的には明朝皇帝の秘書官・顧問官ともいべき存在の大学士によって構成される内閣であるが、本論文では事実上の内閣権力の伸長という史実を、嘉靖年間から隆慶年間までの各段階における個別具体的な政治課題に関連づけて説明することが企図されている。

第 1 章「嘉靖「復套」考」では、嘉靖 25 年 (1546) から嘉靖 27 年 (1548) にかけて行われた明朝のオルドス回復計画 (「復套」) をめぐる政治過程を分析している。陝西三辺総督曾銑・内閣首輔夏言の主導のもとに中央官僚の大多数の反対を押し切って推進された「復套」が、嘉靖 27 年 (1548) 正月に嘉靖帝の上諭によって突如中止されるまでの政治過程を検証し、皇帝の決裁が官僚の担う政策立案・政務遂行の過程や内容と異なる要因によって行われ、結果として官界に大きな混乱をもたらしていたことが明らかにされている。

第 2 章「嘉靖馬市再考」では、嘉靖 30 年 (1551) の馬市を題材として、「奸臣」として名高い首輔嚴嵩の執政について再検討を試みている。嘉靖 29 年 (1550) 8 月に北京城を包囲するなど、交易要求を背景としたモンゴルの圧力に対して、嘉靖帝はモンゴル征討の意を固めることになる。しかしながら、中央や地方の主だった官僚は無謀な征討計画の中止とモンゴル侵攻の回避とを図るべく、北辺地帯において彼らの要求に沿う形での明蒙交易 (馬市) の実施へと漕ぎ着けたのであった。先行研究において嘉靖の馬市問題は短期間で中止に追い込まれたこともあって嚴嵩の無能・無策の象徴とされてきたが、ここではモンゴルと直接対峙する地方の実情に配慮しない皇帝のもとで、むしろ事態の軟着陸を図ろうとした点に嚴嵩執政の積極的な意義を認めるという新たな見解が提示されている。

第 3 章「隆慶時代の内閣政治の展開」では、隆慶年間の内閣政治が内閣大学士の頻繁な交替との関連で跡付けられている。先行研究に見られる「保守派から革新派へ」という二項対立的構図から離れて、本章では当該期の大学士個々人の政治理念や志向に基づく政治状況への対応について、各人の文集史料に依拠した考察がなされ、政治への意欲を示さない隆慶帝への代替わりを契機として、内閣の性格が皇帝の“顧問団”から政治を主導する“行政府”へと変化したことが論じられている。

附篇『少保鑑川王公督府奏議』と『兵部奏疏』は、第4章から第6章にかけて考察される隆慶和議の第一級史料、『少保鑑川王公督府奏議』および『兵部奏疏』についての解題である。両史料はいずれもわが国には現存せず、きわめて貴重なものであるが、特に後者は著者自身が北京の中国国家図書館特蔵善本室の調査によって発掘したものである。

第4章「アルタン封貢をめぐる政治過程」では、嘉靖以来の対モンゴル強硬方針が転換され、隆慶5年（1571）3月にモンゴル首長アルタンの封貢（順義王への冊封と明朝への朝貢）と宣大地区での互市（朝貢に伴う交易）が裁可されるまでの政治過程を詳細に検討している。休戦状態の破綻という危機意識のもとで封貢・互市を主張する宣大総督王崇古に対して、中央の管轄部局である兵部の対応はきわめて消極的なものであった。その一方で、内閣は当該地方官との連繫を通じて具体的対応策を練り上げ、隆慶帝に直接働きかけることで最終的に封貢・互市の実現をもたらしたのであった。ここでは当該時期に内閣が地方官の要請に応えて迅速な政策決定を実現する存在として、そのプレゼンスを高めていたことが論証されている。

これに対して第5章「陝西における互市実施をめぐる政治過程」では、内閣主導の政治運営が地方官の活動に及ぼした負の影響について論じられている。陝西地区での互市は宣大地区より遅れて隆慶5年（1571）8月に許可されたが、その過程で陝西地区の地方官が互市に強い難色を示したにも拘わらず、内閣等の推進派は互市の実施へ踏み切ったのであった。しかしながら、後に隆慶和議の破綻を決定づけたものは、当時の地方官が提起していた問題であり、本章では隆慶和議がはらむ複雑な側面とともに、中央主導による諸政策の断行という首輔高拱・次輔張居正の政治手法に内在する矛盾が具体的に提示されている。

第6章「隆慶五年（一五七一）三月の廷議をめぐる」では、王崇古「封貢八議」というアルタン封貢・互市の実施要項案をめぐる、隆慶5年（1571）3月に開催された廷議の考察がなされている。ここでは『兵部奏疏』の分析を通じて、当該廷議の開催に至る段取りや廷議に参画した各官の意見など、廷議をめぐる具体的状況が細部にわたって解明され、また皇帝専制下の政策決定では、皇帝権力の正当性を維持する仕組みとして、廷議に対して皇帝が受動的に判断を示すというプロセスが機能していたと指摘されている。

第7章「丹陽布衣邵芳考」では、筆記（随筆）などに断片的な記述しか残されていない「布衣」邵芳の活動が、上海図書館所蔵『邵氏宗譜』によって跡付けられている。倭寇の最盛期という時代状況の中で、布衣として生きる道を選択した邵芳は、幅広い学識を身につけて官僚・士大夫と交流し、やがては浙江総督胡宗憲の幕府を振り出しに政界の裏側で活躍することになる。こうした邵芳の事跡を通じて、官身分を持たない政客や幕客という人士が、明末の政治を動かす不可欠のアクターとして存在していたことが実証されている。

以上の考察の後、結論では、各章の内容の総括が行われるとともに、伝統中国に固有の政治システムの特徴を皇帝専制との関連で、より抽象化した議論が提起されている。嘉靖から隆慶にかけての明朝中央の政策決定過程、或いは象徴的には隆慶5年（1571）3月の廷議の分析を通じて、皇帝権力の正当性を支えるためには何よりも官界全体の合意が政策決定の不可欠の条件であり、従って当該の決定に有効な強制力を付与するための装置として皇帝専制は維持されてきたこと、また、それは官僚・布衣に拘わらず、各々が自らの与

件を活用して利益や権益を追求しえるという、きわめて“自由”かつ“開放的”な社会特有の政治の有りようを象徴するものであったことが指摘されている。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 三 木 聰  
副 査 教 授 佐 藤 鍊太郎  
副 査 准教授 吉 開 将 人

## 学 位 論 文 題 名

### 明代後期内閣政治史研究

－十六世紀後半の「北虜」問題をめぐる政治過程分析を中心として－

本論文は、16 世紀後半における中国明王朝の政治史を、「北虜」問題といわれる対モンゴル政策の展開を題材として、中央における政治過程の分析を中心に考察したものである。主題として取り上げられるのは、本来的には明朝皇帝の秘書官・顧問官ともいえるべき存在の大学士によって構成される内閣であるが、本論文では事実上の内閣権力の伸長という史実を、嘉靖年間から隆慶年間までの各段階における個別具体的な政治課題に関連づけて説明されている。

中国明清史研究という分野において、特にわが国では政治史の領域はむしろ後発に属するものであり、従って、多種多様なアプローチのもとに様々な論点が提示され、かつ活発な論戦が展開されるという状況には未だ至っていないといえよう。これまでの研究史でも静態的な政治制度史研究や皇帝・官僚等の人物評価研究が主だったものであり、また、近年では当該期の政治の具体像を描き出す試みは行われているものの、種々の要因が錯綜する複雑な政治状況を「中央対地方」或いは「保守対革新」という二項対立的な構図によって単純化する議論に収斂させる傾向が見られるのである。

こうした明代政治史研究の動向を踏まえながら、本論文ではむしろ明代後期の政治史像をより立体的・構造的に描き出すことを目的としているが、その方法上の特徴を抽出するならば、次の四点を指摘することができる。第一に、個別具体的な政治過程に即して、皇帝、内閣の首輔・大学士および六部・都察院等の部局に携わる中央官僚から、北辺の前線に派遣された総督・巡撫等の地方官まで、それぞれの役割を仔細に検討していることである。第二に、個々の政策決定過程の分析を通じて嘉靖・隆慶期の政治構造全体を照射するために、政治学のいわゆるイシュー・アプローチという手法が採られていることである。従って、第三に、当該の政治世界に登場する官僚・士大夫層が書き残した言説を博搜し、皇帝に提出された奏議のみならず、中央・地方の官僚間で遣り取りされた書簡や、政策決定に重要な役割を果たした廷議（中央高官による全体会議）史料の緻密な分析が行われていることである。そして第四に、明代後期政治史の具体像を描き出すという研究の先に、

現代政治にも繋がる伝統中国に固有の政治文化をも射程に納めていることである。こうした方法的特徴に基づき、全七章に及ぶ本論の考察が行われており、また附篇として本論に関わる史料の解題がなされている。

本論文は、史料への徹底した沈潜によって、嘉靖から隆慶にかけての明代政治史の展開を精緻に、かつ鮮やかに描ききったものと評価することができる。そこから浮かび上がるものは、本来は皇帝の秘書、或いは顧問としての役割を果たすべく存在していた内閣が、政治のイニシアティブを掌握し、政策の決定と遂行に主体的・積極的に関与する、いわば“行政府”へと脱皮していく歴史のダイナミズムである。従って、本論文は必然的に、万暦初期にいわば専権宰相として政治を牽引した張居正の時代、さらにはポスト張居正期の政治史的分析という次の課題をも用意することになる。

しかしながら、本論文の成果はこればかりではない。それぞれの時期の政治的課題に対して、中央・地方を問わず、各レベルの官僚たちが様々な思惑や権益を背景に当該の課題に立ち向かうという、ある種の混沌とした政治世界のベールを些かなりとも引き剥がして開示してくれたこと、また中央の主だった官僚が一堂に会して開かれる廷議の全貌をほぼ解明したことなど、学界に対する貢献はきわめて大きいといえよう。さらに特筆すべき点は、従来、全く知られることのなかった『兵部奏疏』（中国国家図書館所蔵）という第一級史料を自らの手で発掘・紹介し、かつ詳細な分析を加えたことである。これによって本論文はきわめてオリジナリティのある、高水準の研究となりえたのであり、また当該史料が斯界に共有されることで、今後、明代政治史研究の分野においてより豊かな議論の展開が期待される。

なお、本論文は日中の査読付き学術雑誌に発表された4本の個別論文、東洋史研究会の依頼論文1本、および書き下ろし論文2本と史料解題とから成っているが、既発表の個別論文はこれまできわめて高い評価を受けていることも附言しておきたい。

他方、本論文に全くの瑕疵がないわけではない。それは引用された漢文史料の書き下しに妥当でない表記が見られる点や、また、結論で展開された抽象的な議論に著者の性急さという若干の危惧が感じられる点である。しかしながら、これらの点が本論文の価値を全く損なうものでないことは言うまでもない。

以上から、本審査担当者は全員一致で本学位申請論文を博士（文学）を授与するに相応しいものと認定する。